MIMIC

2021 年度活動報告

本プロジェクトでは、現在進行形で活動を続けるアーティストへのリサーチとアーカイブを通じて、これからの美術史における作者や作品、地域の語り方を探っている。

本稿では研究報告の場を借りて、2020 年より継続している画家・石井海音のリサーチの改善点を整理することとしたい。そのためにまず、MIMIC のねらいを概要する。

MIMIC には、二つ特徴がある。一つ目は、現行のアーティストが、自分たちの活動する地域に関しての記録・調査を行うリサーチプロジェクトであることだ。MIMIC メンバーの岡本秀（絵画）、熊野陽平（現代美術）は、京都の美術―より細分化すると、京都市立芸術大学での美術教育―に接してきた当事者として、同じ地域にゆかりのあるアーティストへのリサーチを行なっている。

リサーチの方針は、コミュニティ・アーカイブの考え方から出発したものである。コミュニティ・アーカイブにおいては、地域に住む人々が、自ら主体的に記録を作る。そこでは、客観性のある調査事実や学術的に価値の保証された公的記録とは違って、市井の人々の主観的な語りが大切にされる。

これを踏まえ、MIMIC は①アーティスト自らが、身近なアーティストについての記録を残すこと、②記憶の再編成、取捨選択によって大きな物語を記述していこうとする取り組みに対して、個人の抱える複雑さを、なるべく形を保ったまま記述する方法を探すことを念頭に調査を行なっている。

二つ目の特徴には、リサーチ対象となったアーティストの「模倣」による調査方法が挙げられる。模倣を調査方法とするに至ったのは、岡本、熊野が参加するマンガ冊子『おばけの連判状』において、参加者の描いたオリジナルの物語を改変しあう方式を用いたことが発端である。『おばけの連判状』では、ほとんどの参加者にとって慣れないマンガ制作を扱い、参加をアーティストに限定しない。さらに、模倣や改変によって互いの作品へ介入を試みるものだが、MIMIC ではアーティストが用いる固有の技法やテーマを解体し、開かれた技術へと読み替える意味で模倣行為が用いられる。

石井海音のリサーチにおいては、石井の作品制作についてインタビューを行い、岡本が石井の手法を使って油画作品を制作した（アーティストの模倣によるリサーチのことを、プロジェクト名のとおり MIMIC と呼んでいる）。

MIMIC のリサーチ手法を用いた本格的な記録としては石井が初めてだが、石井をリサーチ対象とした理由は、調査者の岡本と同世代で共に京都市立芸術大学で絵画を学んでおり（岡本が日本画、石井は油画で専門は異なる）、おばけや画中画といったモチーフを扱っている点など共通の関心が見られたことが大きい。また、ここで深く踏み込むことはできないが、石井の作家性に、同世代やこれからの絵画を理解するうえでの重要な手がかりがあると筆者（岡本）が感じていたことも理由の一つだ。

紙幅の都合上、リサーチの詳しい概要は 2020 年に開設した MIMIC ウェブサイト(https://mimic-art.net/)と現在制作中の記録集を参照されたいが、以上のように、MIMIC では実験的な方法を通じてリサーチ・アーカイブ活動を行なってきた。一方、暗中模索の部分もあり、コンセプトや活動内容については批判や反省点があった。

最も多く批判があったのは、なぜ評価の定まらない若手アーティストを対象とするのか、という意見だ（例：もっと評価の固まった巨匠や教授クラスのアーティストを対象とすべきではないか）。確かに若手アーティストを対象にすることには問題も伴うが、先に見たコミュニティ・アーカイブの視点と語り方への問いを踏まえれば、当事者視点で身近な対象

をリサーチすることもまた不自然ではないだろう。コミュニティ・アーカイブ的な視点の持つ前提をより浸透させるとともに、MIMIC の発表を増やすことで、この批判に対しては積極的に解答していきたい。

また、石井について語るために岡本の作品を鑑賞することになるなど、リサーチが内包する入れ子構造の分かりづらさをどう提示していくかも検討の余地があると思われる。加えて、ドキュメンテーションの単純なクオリティにおいても、技法調査の方法、制作過程の記録をより洗練していかなければならない。

以上のように反省点は多いものの、年度末には石井のリサーチの成果発表展を控え、第二弾、三弾のリサーチも動き出している。前向きに発表を続けて、少しずつ改善を図っていきたい。

今後は、調査者として岡本・熊野以外のアーティストも参加し、調査者の興味や活動に合わせてリサーチ対象となるアーティストを決定する方針である。

今年度に開始したリサーチは、多摩美術大学で版画を学び、京都市立芸術大学大学院の彫刻専攻に在籍中のクニモチユリによるものである。リサーチする対象は、京都精華大学で版画を学んだ迫鉄平・澤田華の 2 名だ。

最後の改善点に、調査対象がある。リサーチを開始した当初は、京都（または京都市立芸術大学）の美術を調査する名目だったが、活動を継続するうちに、調査対象にぶれが生じてきた。これは、今後リサーチしたいアーティストが様々な拠点で活動を行っていたり、別の地方で長く美術を学んで、現在は京都で制作をしている場合などがあることで、そのアーティストの何をもって「京都」だとするのか判断が難しくなったことに原因する。こうした理由から、対象の範囲を無理に限定することは避け、あくまでも身近なアーティストについてのリサーチとして継続する方向で活動することとした。

以上、MIMIC の活動の改善点を整理し、今後の方針について報告を述べた。

これからも、MIMIC 自身が「考えながら」制作する振れ幅のあるプロジェクトとして進んでいくことで、語り方を考えるという最初のテーマに対して、実践的な解答を試みていきたい。

岡本秀

石井の作風の模倣制作（MIMIC）をする岡本